

---

# 遊戯王 ～四霊使いは可愛い娘～

LEN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王 ～四霊使いは可愛い娘～

### 【Nコード】

N1015Z

### 【作者名】

LEN

### 【あらすじ】

遊戯王の二次創作です！最近またやり始めたら書きたくなくなって書き始めました

主人公、高島蓮哉は転生者。中学三年という中途半端な時期に転生した彼はデュエルアカデミアに通うことになり……？。

シンクロエクシーズはバンバン使います、主に主人公が。チートドロ―とかはどうか分かりませんが、アニメ効果のカードなんかは使う予定です。良ければ読んでいって下さい。よろしくお願ひします

## プロローグその1（前書き）

タイトルに関してはノーコメで。後々出てきます

……色々あつて書き始める事になりました。よろしくお願いします

## プロローグその1

上も下も右も左もないただ真っ白な世界。

目を覚ますと、なぜか俺はそこに立っていた。……というか凄いな俺、立ったまま寝てるなんて。支えも無しにだぞ？

えーと、確か俺は……、いつもの様に塾へ行く前にゲーセンによって初ミのアーケードをやって……、それで……

『目が覚めたみたいですね』

今の誰？、というか本当に此処はどこなんだ？。正直怖いな、俺の精神の中とかふざけて厨二ぶってる場合じゃないのは確かだし。

『……あ、そういうば姿を見せていませんでしたね』

また同じ声が響く。すると突然俺の目の前に何やら白い布を身に纏い、後ろにどでかい翼を生やした男性とも女性ともいえるような中性的な顔立ちの人が現れた

……ん？、翼？

「うおっ！？」

『いきなり姿を現してすみませんね。ただどうしても姿を現さないと話が進みそうにないので。私はモートと言います、以後お見知りおきを』

そういつて頭を下げる……モートさん。ってモート？……モートってもしかすると

「あの……ひよっとして俺、死んだんですか？」

『っ！、……よく気が付きましたね』

「いや、モートって言うとうガリット神話の炎と死と乾季の神の事かなと、思いました……。」

『勤勉ですね、あなたの世界に合わせてウガリット神話のモートという名前を持ってきましたが知っているとは思いませんでした』

そう言ってくすりと笑うモートさん。

いや、ただペル ナで興味持っただけだからね？あれ、色々なところからネタを引っ張ってくるし。……そういや、デ サバOCが海外

でも発売されたって聞いたけど、信仰者から見たら喧嘩売ってる  
しか思われたいんじゃないか？

『正確にはまだあなたは死んでいません。意識不明の重体と言った  
ところでしょうか』

「意識不明の重体？。俺何かやらかしましたっけ？」

『……ショックで覚えていないのですね。いいですか？。あなたは  
塾と呼ばれるところへ行く前、ゲームセンターと呼ばれるところに  
いきました』

うんうん、言い回しがだるいがそれは覚えている。何せ初めてサ  
ハテのEXTRMEでパフェが取れたんだし。

塾へ行った記憶がないとすると……、ゲーセンから塾へ行く途中？

『あなたは横断歩道を歩いている途中、横から来るある異変に気が  
付きました』

横断歩道……、横からの異変……、 つ！？

『あなたは安全なところにいましたが……まだ幼き子供がそれに気  
づいていないのに察知しました。……後はもう、お分かりですよね  
？』

「そうだ、…俺は、走ってあの子を抱きかかえて……っ！、そうだ、あの子はっ！？」

『優しいお方なのですね。安心してください、あの子は多少の擦り傷ですみましたよ。ですがあなたは……』

「それで俺はここにいますね。気になってたことが分かってすつきりしました。ありがとうございます。死んではいないんですよ？」

俺のその言葉に苦虫を踏み潰したような顔になるモートさん。  
なんだ、まだ何かあるのか？

『実は…ここにいますあなたは、あなた自身の魂なんです。普段なら此処へ飛ばされてもすぐにその所有者の体に戻すのですが……何故か反射して体にあなたを入れる事ができないんです。……まるで、あの世界に戻りたくない。そんな感情が強いのか』

「……………」

『自覚があるのですね？。ですが、ここまで強く重い感情を解くとなるとあなたの世界にあわせて約120年から140年。身体の方が持ちません』

……あながちモートさんの言う事は間違っていない。

俺は中学校でも塾でも交友関係が上手くいかず、出来た友達もいつ

嫌われるか不安で仕方がなかった。

こんな口調な癖にトレカやボ　口が好きで、話が出来るやつなんて本の数人だった

地味にDQNも多かったしな。俺には合わなかった

『……………そんな貴方にまだ希望があるとしたら？』

「希望？、そんなものがあるならそんな気持ちにはなってませんよ。何ですか？、どこか別の世界に転生させてくれるとでも言うのですか？」

『その通りですよ、貴方には転生してもらいます』

「っ！？、……………マジで？」

『大マジです』

やべえ、ちよっと普段の口調が出てきていけないと思ったら寧ろノツてくれた。

さてとこういうパターンだと、どこか決めさせてくれるよな。とある…バカテス…IS…

そう言われると色々出てくるな。

『と言っても行く場所はこちらが決めます。何しろ空気がそこにはしないのですから』

「あっ、そうなんですか……………まあそう簡単に人生は上手くいきませ

んしね」

『……とりあえず、高島蓮哉。……こっちに来なさい』

へっ？、今、俺の名前が呼ばれた？。あっ、自己紹介してなかったな、俺の名前は高島蓮哉だ。よろしく

モートさんからは雰囲気さつきと違ってかなり怒ってそうで怖いイメージを感じられる。さらに言えばモートさんは俺じゃない反対側のほうに向かってそう言ってる。

……すると、奥から俺に似た同い年ぐらいの奴が現れた……

## ブローグその1（後書き）

もう一話ブローグを書く予定でいます

## プロローグその2

『……こんな事もあるんですね』

「こっちのほうで驚きましたよ、って事はこいつがその世界の俺って事でいいんですか？」

「お前、俺に向かって指を刺すな。」

……説明しよう。先ほどモートさんがつれてきたのは、俺が転生する先の世界で生きていた俺。

モートさんは俺の名前を知らなかったみたいでその事を話してみると、目を丸くして驚いた。

『考え方はそれで構いません、ですが……、平行世界で考えてもこの確率は1/無量大数以上。』

運命と言つのはこの事を言つのでしょうか』

「多分そうなんだと思います。……だって目の前にいる蓮哉？は見ただ事がないはずなのに、一緒の時間を共に歩いてきたような感じがしますから」

「気持ち悪い言い方すんな。だがまあ、……今回ぐらいはそれに感謝しねえとな。あのつまらねえ世界やマジック&amp;mp;ウィザースとも放れられるわけだからな」

……？、今何ていった？、……マジック&amp;mp;ウィザース？。  
これはもしか……

「モートさん、もしかして俺が行く世界って俺たちでいう遊戯王の世界ですか？」

『そついえば言っていますんでしたね。はい、貴方の行く世界は遊戯王、時代系列で考えるとGXのところですね』

何で俺死んでからこんなに付いてるの？、最近やり始めたばかりじゃん。開闢の禁止が解除+トリシュが当たる+レダメ再録で興奮してきた俺には素晴らしい事だよ？……元の世界に未練がないわけでもないけど

「さつきから言ってる遊戯王ってのは何だ？」

『貴方の世界で言うマジック&amp;mp;ウィザースですよ。最も、さらに色々な事が成されていますがね』

「冗談じゃねえ！、何で俺がまたそのある世界に行かなくちゃならないんだ。雑魚ばっかで話にならねえ」

話を聞く限りだと、こいつはデュエルも出来て実際かなりの実力者らしい。……だが、

「お前、デュエル出来るのか？。と言うか、その世界で粹がってる様じゃあこつちの世界じゃすぐ負けるぜ？」

「ああ、俺が負けるとでも？。調子に乗ってんじゃねえぞ。」

「なら遊戯王らしく、デュエルで決着つけようぜ。俺が勝ったら、転生はこのまま行う。俺が負けたらお前の好きにしろ」

「いいぜっ！受けてやるっ！」

やっぱりあの世界ではデュエルですべてが決まるらしい。ちよっと挑発したらすぐに乗ってくれた。……周りじゃそんな強くなかったけど大丈夫かな？

ここでモートさんが大きいため息をつく、どうしたんだろうか？

『……意気込むのは勝手ですが、今デッキとかは持っているのですか？』

「「あ……………」」

『しよつがありませんね』

モートさんが何処からか杖を取り出して振ると、俺と蓮哉の腕にデュエルディスクが装着されデッキも刺さっている。すげえ、さすが神様！

『刺さっているデッキは貴方方の使っていたデッキです。好きに使ってください』

「モートさん感謝します」

「この場においてだけは感謝してやる……行くぞ、」

「<sup>デュエル</sup>決闘!!!」

高島 蓮哉 (Y)	LP:4000
VS	
高島 蓮哉 (M)	LP:4000

「俺のターンからだ！、ドロー！。俺は豊穰のアルテミスを守備表示で召喚！」

豊穰のアルテミス 効果/光属性/天使族/攻1600/守1700

そういつて、場に出てくるアルテミス。……すげえ、これがソリッドビジョンか……ってアルテミス！？

「お前そのデッキ、まさかとは思うが……エンジェル・パーミッシ  
ョンか!？」

「良く分かったな。俺はカードを三枚セットしてターンエンドだ」

蓮哉 (M) LP4000

豊穣のアルテミス 効果/光属性/天使族/攻1600/守17  
00

伏せカード×3

手札 6枚 2枚

「厄介なデッキだ。俺のターン、ドロー!」

「その瞬間、俺は強烈な叩き落としを発動!、ドローしたカードを  
捨てる!さらにアルテミスの効果でカードを一枚ドロー!」

「くっ、やっぱり伏せてあったか」

だが今のカードにはあまり関係ない、むしろ好都合だ。なぜなら……

「俺は手札から魔法カード、地割れを発動しアルテミスを破壊!」

「させねえよ、マジックジャマーを発動。手札を捨てて地割れを無効。さらにアルテミスの効果でドロー。」

「なら、地砕きを発動！。アルテミスを破壊！」

空から物凄いでかさの拳が降ってきてアルテミスに直撃する。……これ、ロツクン・EXEのジャスティス・ワンじゃねえのか？

「ちっ、しょうがねえ」

「これで邪魔なドロースースが消えた。俺は手札からマシンナーズ・ギアフレームを召喚する。ギアフレームの効果！、デッキからマシンナーズと付いたカードを一枚手札に加える！。俺はマシンナーズ・フォートレスを選択して手札に加える！」

「っ！？、俺は天罰を発動！、手札を一枚捨て、効果モンスターの効果を無効にし破壊する。残念だったな、キーカードを手札に加えられなくて。(……にしても、今のカードは何だ？。マシンナーズはソルジャー、スナイパー、デフェンダー、フォースの四枚しかなかったはずだ。見た事ねえカード……おもしれえ)」

とりあえず読者の皆様にも俺のデッキがわかっただろう、除去マシンガジエだ。代償マシンガジエもいいかなとは思ってたけれどエクシズをそんなに持ってなかったから、ヴェーラーを使ってシンクロも容易なこっちにした。トリシュ出せたときは泣いた

それと天罰にはなんとなく予想が付いていた、もしくは攻撃の無力

化。……これで伏せカードは無くなった。ならば俺の勝ちだ！

「俺は墓地のマシナーズ・フォートレスの効果発動！、手札の機械族モンスターをレベルの合計が8以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。手札のレベル8のモンスター、マシナーズ・カノンを墓地に捨てる事によってマシナーズ・フォートレスを特殊召喚！」

マシナーズ・フォートレス 効果/地属性/機械族/攻2500  
/守1600

「はぁ！？なんだそのカード、攻撃力2500の割に特殊召喚条件が軽すぎるだろ！。それよりそのカードのサーチはさっき封じたはずだ！、いつの間に……っ！？」

「召喚条件については同感、……お前がさっき捨ててくれたんじゃないか、強烈な叩き落として」

「くそっ！、手札破壊が裏目に出たか！」

まあ、さっき言ったようにこいつは手札からも出せるからどっちにしろ無意味なんだよね

「さてと、マシナーズフォートレスでダイレクトアタック！、更

に手札から速攻魔法、リミッター解除を発動！。フィールドにいる機械族すべての攻撃力を倍にする！、これで終わりだ！」

「うあああああ！！」

高島 蓮哉（M）

LP 4000 - 5000 = 1000

死んでからの初めてのデュエルは俺の勝利に終わった……。

というかドロローが強すぎか？。……いや、そうでもないな。

前に後攻ターン目にフォートレス二体とブレイカーが出て、リミッター使ってワンキルしたこともあるし

「それじゃあ俺が勝ったから転生はさせてもらうぞ、お前も転生もな」

「好きにしろ！、……俺も、お前の使っていたカードに興味を持った。また始めてみるか」

「俺より強い奴なんて向こうじゃ山ほどいたがな、それとこっちではこれは一種の遊びだからやり過ぎると周りに引かれるぞ。」

「そうなのか、なら受験シーズンだし真面目に勉強するか？」

「それがいい」

そんなことを話し合って二人で笑い合う。……これが昨日の敵は今日の友と言う奴だろうか？。といってもこいつは俺自身であって敵じゃないし、一日経ってないがな

『……そろそろ、転生しますがよろしいでしょうか？』

「あ、そうだ。転生するのなら、頼みたい事があるんですが……」

『頼みたい事？、何でも言うてください。こっちの蓮哉がいなくなる切欠が出来たのはあなたのおかげですので』

「ありがとうございます。それじゃあ」

俺の頼み事はスルーの方向で。というか、遊戯王に転生ならしてもらう事は一つだろ。

といっても俺は二つ頼んでしまったがな

「……じゃあな、俺。そつちでへマするなよ」

「こつちの台詞だ。……あいつを泣かせるんじゃないぞ」

「あいつ？、誰のこ」

『それでは転生を開始します。』

俺の台詞はモートさんの声にかき消された。

ちなみに、モートさんが言っていたあつちの蓮哉がいなくなると言うのは、あいつは俺が来るずっと前からあそこにおいて人間に戻せるのを待っていたらしい。

俺の着く時間は蓮哉が倒れて三日たったところからという話も聞いた。

しばらくしていると体が軽くなっていくのを感じる、流れに身を任せるだけで先に進んでいるのがわかる。  
そして、行く先には輝かしき光が。

これが転生。

「ん、ふわぁっと。ここは何処だ？」

目を覚ますとそこは一部屋の病室、どうやら目を覚まさないままずっと入院していたようだ。

何やら足の辺りが重たい、俺は上半身を起こして確認する。……そこには、俺と同じぐらいの少女が疲れているのか、座ったまま眠っていた

「……ZZZ、はっ。もう朝っ!？」　　へっ?」

「痛っ!?!、いきなりに何し　　」

その女が急に足を叩くようにするからつい怒鳴ろうとしてしまったが、それ以上は声に出せなかった。なぜならそいつは……目に涙を堪えてこっちを見つめてきていたからだ。

こっついうのは苦手だ

見つめあう事数秒、急にそいつは俺に抱きついてきた。

……って、うおっ!?!、何だこの状況!どうしたらいいのかわからねえ!

「……し、心配かけさせないですよ。死んじゃったらかずと……。う、うわあああん!」

……本当に何をして良いのかわからない、少女は俺の胸の中で泣き続けていて俺の心臓がバクバク鳴ってる

あの野郎、何がつまらないだ。こんな完全にフラグのたってるような奴がいて。

リア充は爆発しろっ！

## プロローグその2（後書き）

プロローグはこれで終わりです。結局デュエルしちゃいました

次回は早速アカデミアの入学デュエルに入ろうと思います。  
霊使いもやっと登場します

読んでくださってまことにありがとうございます！

## 第一話 入学試験

……俺が転生してから、早くも…半年が経ちました。

この半年は色々あったなあ……、あの少女の事だったり、海馬コーポレーションやペガサス島に乗り込んだり、精霊が見えちゃったという事だったり。

……そのことは書かないのかって？、だって早く入学したかったんだもん。

でもとりあえず、俺の事についてだけ話しますか

そもそもこの世界の俺は家族が皆他界して、孤児院に入れられてた病室で抱きついてきた少女が一緒の孤児院に住んでいる子供の一人で俺と同じ時期に入ってきたらしく小さい頃はよく一緒に遊んでいたらしい。名前は宮永彩加<sup>みやながさいか</sup>。

まあこいつは、しばらく出ないだろうからそつとしておくとして…  
…え？、そいつはアカデミアに行かないのかって？。  
なんでも行きたいところがあるらしいぞ、詳しくは知らん。

ちなみに、保護者である孤児院のおじさんおばさんと彩加には俺のことが速攻でバレた。

流星に黙っておくわけにもいかなかったので、起きたこと全て話すとおじさんおばさんは無言に。彩加は大泣きしていた。

自分たちのいる世界をつまらないと言われたんだ、そうなるのも当たり前か、

ただこれでまた一人ぼっちになるのかなと思いきやそんな事はなかった。

おじさんとおばさんは『例えお前が今までの蓮哉じゃなくても、お前は私たちの息子だ』と言って優しくしてくれた。

彩加は最初こそ抵抗があったものの、デュエルの事などを話しているうちに一番親しみを感じるようになった

そして俺は決めた。この世界の異端である優しくしてくれたおじさんおばさんや彩加に恩を返したい。それが俺の心からの願いだった。

そして入学試験、実力テスト当日。

俺は自分の番が待ちきれなく普段より貧乏ゆすりが激しい。  
いや、こんな事じゃ勝てないな。しっかり精神を落ち着かせないと  
な。

そんな訳で軽く瞑想にはいるうとする、しかし

『アハハ、これで三連勝だー。ヒータ弱ーい』

『てめえぶつ飛ばすぞー！、つーか最初の頃はお前この中で一番弱  
かったじゃねえか！』

『それなら今この中で一番弱いのはヒータだよね？』

『てめえの水分全部蒸発してやろうか！』

隣では赤色の髪をした少女と青色の髪をした少女がデュエルをして  
いた。二人とも同じような格好をしているが、彼女たちは  
、一般人には見えない精霊と呼ばれるものであった

それにしても……うるさい、誰でもいいからあの二人をなんとかしろ！

『まあまあ、ヒータも少し落ち着いてください。それにエリアも』

『……今は騒いじゃ駄目。……マスターが、さっきからピリピリしてる』

そんな二人を今度は茶髪と黄緑色の髪をした二人の少女は止めにかかると。よし、ナイスだ二人とも。

『……ちっ、』

『アハハ、今日はもう終わりだね、……また明日も負けてよ？ヒータちゃん』

『やっぱり今ここでぶちのめす！、おら、もう一回デュエルだ！』

『だからあんまり騒ぐと』

『お前ら、いい加減黙れっ！』

やばい、もう我慢の限界が切れた。俺ってこんなに早く切れるよう

な奴だっただけ?…まあいつか

とりあえず赤髪と青髪の少女……ヒータとエリアに大声で怒鳴りその場に座らせる

『あーあ、だから言わんこっちゃないですよ』

『……今日のマスター、いつもより気が短い』

『そりゃあそうですね。この間の筆記テストであんなミスを犯しちやっただからですから』

『……それもそう』

「アウス、ウイン聞こえてるぞ。少々八つ当たりになるがお前らもこっちで説教だ」

理不尽だっ!と声上がるが、そんなモンは無視だ無視。こいつらには……

『受験番号100番、高島蓮哉。テストを開始します。デュエルフィールドに来てください』

ピンポンパンポーンとアナウンスが入る。ちっ、なんて悪いタイミングだ

「……説教は中止だ、じゃあ行ってくる」

『ふうー、危なかった』

『つたく、てめえが……』

『僕とウィンなんかとはっちりですよ……はあ』

『……マスター、頑張ってる』

とりあえず、まともな言葉を発したウィン以外は説教の続き確定だな

俺は駆け足でデュエルフィールドに行き、対戦者となる試験官と向き合う。

さて、頑張るとしましょうか

「受験番号100番、高島蓮哉です。よろしくお願ひします」

「そうか君が……。筆記テストでミスをやらかしてしまった子が」

そう、俺は別の日に行われた筆記テストでとある失態を犯してしま  
った。

問題は簡単だった、難しいのも少しは含まれていたがそこまで苦戦  
するような問題はなかった

なら何をしたのか……。解答をずらして書いてしまったのである。  
元々問題数が多かったため、全て書き終わるのに時間が掛かった。  
全部で百二十問あるうち、三十問目位から全部ずらして書いてしま  
ったため、100番という危ない数値になってしまった

「それさえなければ、全問正解で一位だったんだけどね……」

「えっ？、そうだったんですか？。でもまあ、間違えた分は次にそ  
うしないための糧になりますから。頑張っておシリスレッドに齧り  
付きますよ」

「そうか、前向きな姿勢なのは良いことだ。……世間話もこれぐら  
いにしてそろそろ始めようか」

「お願いします」

試験官がデュエルディスクを構え、こちらと同じく構える。

そして互いに始まりの一言を叫ぶ。

「デュエル！」

高島蓮哉      LP：4000

試験官      LP：4000

手札はどんなものか……まあまあだな、悪くない。先功は向こうらしいな

「私のターン、ドロー！。私はおろかな埋葬を発動する、効果によりデッキからモンスターを一枚墓地に送る」

いきなり埋葬？、……というか、埋葬を使う人がこっちにいるのが驚きだ。前の世界じゃ完全にガチだったからなあ。嫌な予感しかない

「さらに魔法カード、調律を発動！。手札にシンクロンと名のつくモンスターを一体手札に加え、その後デッキの一番上を墓地へ落とす！。そしてジャンクシンクロンを召喚！」

シンクロデッキかよ！、……え？、どうしてシンクロが普及されているかだつて？

俺がモートさんに頼んだんだ、シンクロとエクシーズを使いたいで。そしたらペガサス島や海馬コーポレーションに行くはめになつたがな。

そんでシンクロとエクシーズは三か月前くらいに公表され、新発売のパックに封入されることになった。色々種類があつたが、その中の一つが今試験官の使っているジャンクだ。

ちなみに正確な願いは、元の世界にあつたカードを俺が使えるようにしてというもので。公表されてから三日足らずでカードが差出人不明で山のように届いた。

多分モートさんだろう、つーか他にいねえ

「ジャンクシンクロンの効果を発動、墓地にいるレベル2以下のモンスターを一体特殊召喚する。私が出すのは海皇の長槍兵、攻撃表示で特殊召喚！。さらにモンスターが特殊召喚されたことにより手札からドッペル・ウォリアーを特殊召喚！」

モンスターゾーン（試験官）

ジャンク・シンクロン 効果/闇属性/戦士族/攻1300/  
守 500 チューナー

海皇の長槍兵 通常/水属性/海竜族/攻1400/守  
0

ドッペル・ウォリアー 効果/闇属性/戦士族/攻 800/守  
800

……おいおい、一ターン目にそんな展開するなよ。  
「…か本当にそれ試験用デッキか？、この世界じゃあ、頑張ればプ  
ロになれるぞ？」

「さらに、チューナーであるジャンク・シンクロンにドッペルウォ  
リアーをチューニング！  
現れる！ジャンク・ウォリアー！！、さらにジャンク・ウォリアー  
の効果にチェーンしてドッペル・ウォリアーの効果を発動！。  
シンクロ素材としてこのカードが墓地に送られたとき、ドッペル・  
トークンを二体、攻撃表示で特殊召喚する事ができる。  
そしてジャンク・ウォリアーの効果が発動される。このカードの攻  
撃力は自分フィールド上に表側表示で存在するレベル2以下のモン  
スターの攻撃力の合計分アップする。  
海皇の長槍兵、ドッペル・トークン二体の攻撃分攻撃力を上げる！  
パワー・オブ・フェローズ！」

モンスターゾーン（試験官）

ジャンク・ウォリアー	効果/闇属性/戦士族/攻2300+
2200=4500/守1300	シンクロ
海皇の長槍兵	通常/水属性/海竜族/攻1400/
守 0	
ドッペル・トークン×2	通常/闇属性/戦士族/攻 400/
守 400	

……うわー、これが先行ワンターン目の場かよ。OCGじゃ足りないかも知れんが、こっちの初期ライフはたった4000だぞ？。既にオーバークイルだよ

周りからは、「もう…あれ終わっただろ」とか「可哀想だな」とか聞こえてくるけどこんなの全然挽回できるからな？。

他にもシンクロに憧れの目を抱く者もいる、………だったら俺も見せてあげようか？

「カードを1枚セットしてターンエンド。………さあ、この壁を乗り越えられるかな？」

明らかな挑発、いやもう俺ウォリアー倒せるカード持ってるし。このくらいなら全然余裕

「出来る限り頑張りますよ。俺のターン、ドロー！。俺はフィールド魔法、竜の渓谷を発動！」

俺がそう宣言すると辺りが巨大な谷に変わる。  
飛んでいるのは鳥なのか竜なのか……、まあドラグニティのカードだから両方だろう

「竜の渓谷？、知らないフィールド魔法だな」

「じゃあ、早速効果を使わさせてもらいますよ。竜の渓谷の効果発動、1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨てる事で自分のデッキからレベル4以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加えます。」

そして俺はドラグニティ・アキュリスを攻撃表示で召喚。アキュリスの効果発動！、このカードが召喚に成功した時、手札から「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚し、このカードを装備カード扱いとして装備する事ができます。

俺はドラグニティ・レギオンを手札から特殊召喚し、アキュリスを装備させます」

モンスターゾーン（蓮哉）

ドラグニティ・レギオン 効果/風属性/鳥獣族/攻1200/  
守 800 アキュリス装備

「それがどうした、私のジャンク・ウォリアーは攻撃力4500。  
戦闘では破壊できんぞ。」

レギアキュは強いんだぞ？、それを思い知らせてやる

「ドラグニティ・レギオンの効果を発動します、自分の魔法&罫力カードゾーンに存在するドラグニティと名のついたカード1枚を墓地へ送る事で、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊します。俺が破壊するのは……もちろんジャンク・ウォリアー！」

「なんだとっ！？、くそっ、ジャンク・ウォリアーが！」

「さらにドラグニティ・アキュリスの効果を発動します。モンスターに装備されているこのカードが墓地へ送られた時、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊します  
俺から見て右側の伏せカードを破壊してください」

破壊されたのは収縮、選択したモンスターの攻撃力守備力を半分に  
するカードだ。

「レギオンでドッペル・トークンを攻撃っ！……400のダメージを受けてください」

試験官 LP4000 3600

「メインフェイズ2に入ります、カードを二枚セットしてターンエ

ンドです」

モンスターゾーン（蓮哉）

ドラグニティ・レギオン 効果／風属性／鳥獣族／攻1200／

守 800

魔法トラップゾーン

伏せカード×2枚

「私のターン、ドロー！ 強欲な壺を発動、デッキからカードを二枚ドローする。」

…手札からモンスターを一枚捨てることによりクイック・シンクロンを特殊召喚！

クイック・シンクロンはシンクロンと名の付いたチューナーの代わりにすることができる！

場にいるモンスターのレベルの合計は8！。クイック・シンクロン、海皇の長槍兵、ドッペルトークンをチューニング！。全てを破壊しろっ！、ジャンク・デストロイヤー！」

ここでそれを出しますか普通っ！？、どんだけドロー力持ってんだよこの人

「ジャンク・デストロイヤーの効果、このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊す

る。

私はレギオンと竜の渓谷を選択し破壊する！、タイダル・エナジー

！！

さらにシンクロ・キャンセルを発動！

シンクロモンスターをエクストラデッキに戻し、シンクロ素材にしたモンスターを墓地から特殊召喚する！

さらに三体をチューニングしてジャンクデストロイヤーをもう一度召喚！、伏せカード二枚を破壊！タイダル・エナジー！」

「なにっ！？」

うわあ、俺のフィールドが空きじゃねえか。しかも手札は一枚。

試験官の方は手札がゼロだけど、ジャンク・デストロイヤーが場に残っている。

かなり危ないぞ？

「ジャンク・デストロイヤーで攻撃！、デストロイ・ナツクル！」

「うおっ！？」

蓮哉      LP4000    1400

「くっ、……やばいな、この状況」

「どうだい、これでもまだ諦めないのかい？」

……諦める、だと？

「……ふざけないでください」

「？、なんだと」

「……俺は、…俺だけじゃない。ここに来る奴らはみんな何かしら、願いを持ってそれを叶えるためにここに来ているんだ。確かにこの状況では勝てる可能性なんて毛先ほどしかない。」

「……でも、俺はその夢を叶えるまで絶対に諦めたりなんかしない！！俺のターン、ドロー！！。俺は手札より魔法カード、調和の宝札を発動！」

手札のドラグニティ・フアランクスを墓地へ送り、デッキからカードを二枚ドローっ！」

……、つ来た！。このカードなら……勝てる！

「毛先ほどの可能性を……見せて上げますっ！」

俺はドラグニティ・ドウクスを召喚！、このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する

レベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。俺はドラグニティ・フアランクスを選択し装備！」

「さらにドラグニティ・ファランクスの効果を発動！、このカードがカードの効果によって  
装備カード扱いとして装備されている場合、装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する！  
さらに特殊召喚されたことにより地獄の暴走召喚を発動！、デッキからファランクスを二体特殊召喚する！」

「くっ、ジャンクデストロイヤーはエクストラデッキで特殊召喚できない！」

ドラグニティ・ドウクス

効果／風属性／鳥獣族／攻15

00+800／守1000

ドラグニティ・ファランクス×3 効果／風属性／ドラゴン族／攻

500／守1100 チューナー

「ファランクスにドウクスをチューニング！吹き荒れる雷の中から現れる、ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！」

ヴァジュランダの効果、このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル3以下の「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター1体を選択し、装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。この効果によりアキュリスを装備！さらにファランクス二体でオーバーレイネットワークを構築！、エクシーズ召喚！ダイガスタ・フェニクス！」

「え、エクシーズ召喚だど！？。シンクロとエクシーズ、両方を使いこなすなんて……」

「まだまだあ！、ヴァジュランダのもう一つの効果、1ターンに1度、このカードに装備された  
装備カード1枚を墓地へ送る事でこのカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで倍にする。さらにこの効果で墓地へ送ったアキュリスの効果でジャンク・デストロイヤーを破壊！  
そしてダイガスタ・フェニクスの効果！、エクシース素材を取り除くことによって。自分フィールド上に表側表示で存在する風属性モンスター1体を選択する。  
選択したモンスターは1度のバトルフェイズ中に2回攻撃する事ができる！俺はヴァジュランダを選択！」

ドラグニティナイト・ヴァジュランダ 効果/風属性/ドラゴン族  
/攻1900×2×2/守1200 シンクロ  
ダイガスタ・フェニクス 効果/風属性/炎族/攻1  
500/守1100 エクシース

「…こ、こんなことが……………」

「バトルだ！、ドラグニティナイト・ヴァジュランダでダイレクトアタック！」

もう一度、ドラグニティナイト・ヴァジュランダでダイレクトアタック、  
ラスト、ダイガスタ・フェニクスでダイレクトアタック！！。」

「うおおおおおお！！！」

「俺の勝ちです、先生」

「……受験番号100番、合否は追って通知する。君は…帰ったほうがいいだろう、今すぐに。」

「へっ？、どうしてですか」

「早くっ！…さもないと、今のデュエルを見ていた者たちが一斉に集まってくるぞ！」

え？……あ、ああそうか！、やばい、何とかして逃げないと

よく見ると、周りがまだかまだかという空気を全体で作り出している。

これは本気で俺の命に関わる！、少数ならともかく大勢と話すなんてぼっちだった俺に出来るかっ！

「手続きは済ませて置いとくから、君は今すぐに出口に向かって逃げるんだ！

…シンクロ同士のデュエル、とても楽しかった。君が合格してアカデミアに入学したら、またお手合わせ願いたい」

「そんなことは全然オツケーですよ！。それじゃあ、ありがとうございまして！」

くそっ！、十代VSクロノスの試合、生で見たかったのに！。

これで合格できなかったら、呪うぞ、マジで！

『まーた、変な事になっちゃったねえ。』

『……でも、なんだかマスターらしい』

『そういえば、マスターの楽しみにしていた試合を見れなかったのも残念ですね』

『おいお前ら！、さっきの試合見てた奴らが血眼になって追いかけてきてるぞ！？色んな意味で危ねえ！』

「お前ら……はあ、精霊化してると……はあ、身体が疲れないから……はあ、いいよな。」

『きゃー、マスターまで危なくなっただ』

『巫山戯てる場合じゃねえよエリア！。』

……とりあえず思うのがただ一つ、  
こんな一気に顔を知られて、アカデミアでの新しい生活に影響が出  
ないか………不安だ

## 第一話 入学試験（後書き）

という訳で、今回使ったデッキはドラグニティでした。

主人公は色々なデッキを使います、主にDTの

読んでくださってまことにありがとうございます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1015z/>

---

遊戯王 ~ 四霊使いは可愛い娘 ~

2011年12月5日00時50分発行